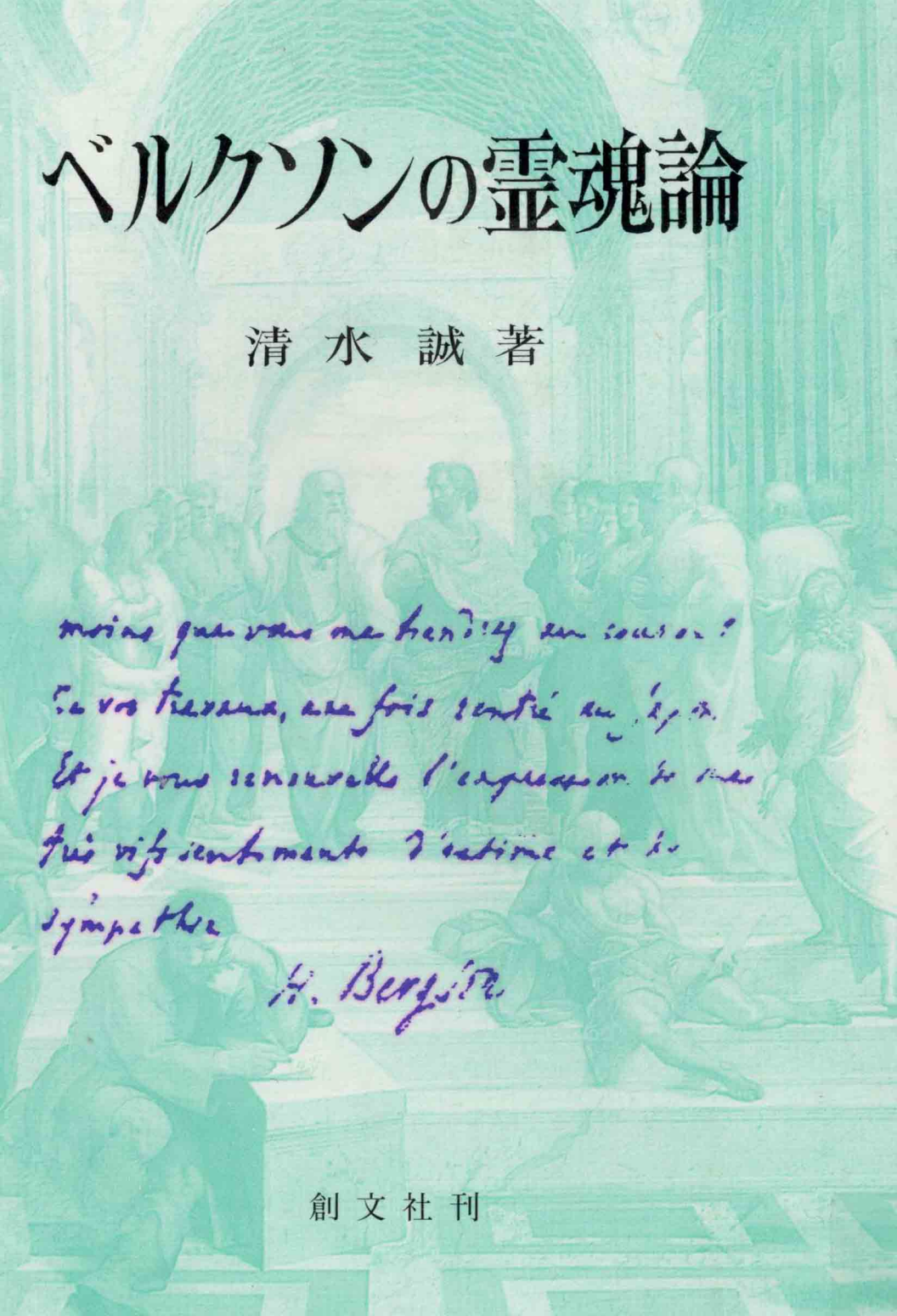
ベルクソンの霊魂論

清水誠著



創文社刊

ベルクソンの霊魂論

清水誠著

創文社

清水　誠（しみず・まこと）
1933年岡山県に生まれる．1958年東京大学教養学部教養学科卒業．現在武蔵大学教授．
〔著訳書〕『近代〈知〉とメルロ＝ポンティ』（世界書院），E．ミンコフスキー『生きられる時間』（共訳），（みすず書房）他．

〔ペルクソンの霊魂論〕

一九九九年二月二五日　第一刷印刷
一九九九年三月二八日　第一刷発行

著者　清水　誠
発行者　久保井浩俊
印刷者　安達精治

発行所　株式会社　創文社
〒101-8051
東京都千代田区麹町二-六-七
電話〇三-三二六三-七一〇一
振替〇〇一二〇-〇-九二四七二

著者との申し合せにより検印省略

暁印刷・徳住製本

ISBN4-423-17113-9　Printed in Japan

凡　例

ベルクソンの著書からの引用は、以下のような著書名の略記号と頁数を（　）で括って本文中に示した。頁数は単行本の頁数を最初に記し、ベルクソン生誕百周年記念版『全集』（Œuvres）ならびに『論集』（Mélanges）の頁数を付記した。例えば、（DI, 112-99）のように。また、『論集』のみの頁数を示す場合には、略記号をMélとし、それに頁数を表す数字を加えた。

DI　Essai sur les données immédiates de la conscience

MM　Matière et mémoire

EC　L'Evolution créatrice

DS　les Deux sources de la morale et de la religion

PM　La Pensée et le mouvant

ES　L'Energie spirituelle

EP　Ecrits et paroles

Mél　Mélanges

デカルトの著書の引用箇所を示す注にATとあるのは、Adam-Tannery版のことである。例えば、AT, I-100とあれば、アダン・タンヌリ版デカルト全集の第一巻百頁ということである。

なお、ベルクソンのテクストに限らず、訳は原則として筆者自身で行うことにしたが、他家の尊訳を使わせて頂くときには、注記して謝意を表することにした。

まえおき

本書は、フランスの大哲学者アンリ・ベルクソン（Henri Bergson, 1859〜1941）が精神と身体との関係について探究した著作『物質と記憶』（Matière et Mémoire）の研究書である。

本書に『霊魂論』という挑発的な題名を付けた理由は、近代科学の基礎である哲学的意識概念について、哲学史全体にかかわる洗い直しが必要であると信じるからである。実にそのことをベルクソンは彼の著作活動の全体を通して行っているが、とりわけ、この『物質と記憶』という書物によって直接的に行っているのである。そのことを明らかにするために、われわれは、『物質と記憶』の注釈を行うに先立って、ベルクソンが関説している限りにおいて、西洋哲学史の回顧的展望を行った。

そのようなことをするよりも、ベルクソン自身がしたように、当代の精神医学、大脳生理学、遺伝子工学等、発展を続ける先端科学の成果をまず勉強して、しかる後に、唯脳論批判でも何でも存分にやってくれという声が挙がるのは分かっている。われわれもまたそのような企てを密かに抱いたことが実はあるのである。しかしながら、専門分化の激しい現代においてはそれはきわめて困難な企てであることを、身をもって知るだけのことに終わったことを自白しなければならない。

そこで、もし哲学者が科学者になることが困難ならば、科学者に哲学者になってもらうしかないのではないか。哲学者が科学者になるよりも科学者が哲学者になる方がまだしも容易なことではないか、このように考えた次第で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ある。そのために、現代の実証科学の認識論の基本的構造を提供しているカント哲学の意識概念から、近代的自覚の出発点となったデカルトのコギトに遡り、さらに古代ギリシアのプラトンとアリストテレスの心魂（プシューケー）に遡るだけでなく、ベルクソンがそこに西欧的形而上学の出発点を見ているエレア派のゼノンのパラドックスにまで遡り、そこから始めて西洋哲学史が如何なる問題を考えながらベルクソンにまで降りて来ているかの一端を述べて、哲学者たろうとする科学者を始めとする一般読者の方々の参考に供したいと念願したのである。

目次

凡例……v
まえおき……vii
序章　エレア派のゼノンとベルクソン――ゼノンのパラドックスと形而上学の誕生……三
第一章　プラトンとベルクソン――永遠真理と時間……二六
第二章　アリストテレスとベルクソン――ベルクソン著『アリストテレスの場所論』注釈……五三
第三章　プロティノスとベルクソン――ローズ-マリ・モッセ-バスティド著『ベルクソンとプロタン』管見……七七
第四章　プロティノスとデカルト――グィレルモ・ジビューフ著『神の自由と被造物の自由』（デ・リベルターテ・デイ・エト・クレアツラエ）と デカルトの永遠真理創造説……一〇七
第五章　デカルトとベルクソン――ジャン-マリ・ベサード著『デカルトの第一哲学』管見……一四一
第六章　カントとベルクソン――ベルクソン著『思惟と動き』（パンセ・エ・ムーヴアン）注釈……一六五
第七章　ベルクソンのイマージュ論――ベルクソン著『物質と記憶』第一章・第四章注釈　観念論対実在論……一九六
終章　ベルクソンの霊魂論――ベルクソン著『物質と記憶』第二章・第三章注釈　唯物論対唯心論……二三〇
結論……二六七

あとがき……二九九
索　引……1～7

ベルクソンの霊魂論

序章　エレア派のゼノンとベルクソン

――ゼノンのパラドックスと形而上学の誕生――

「エレア派のゼノンの議論の批判はベルクソンの諸著作においてワグナー風の主題のように反復される」。ベルクソン生誕百周年記念版『全集』(Œuvres) の序論において、[1] このようにグイエは言っている。さらにグイエのこの言葉に付けられた脚注（4）の教示に従って、ベルクソンの論文「エミール・ボレルの論文に対する反駁」の該当ページ（EP, 284～85-757～58）を見るならば、ひとはそこにベルクソンの次のような言葉を読むことができる。

「古代ギリシアにおいて西欧人の哲学的反省が始まって以来、深化してやまなかった西欧の哲学精神は、哲学史の画期をなす大きな段階的変化に次々と出あってきた。それらの段階を飛ばそうと思っても、それはできない相談である。現代哲学がギリシア哲学を越えようとするのならば、現代哲学はギリシア哲学を通って行かなければならない。それはちょうどデカルトの解析幾何学に至るためには、ひとがユークリッドやなんらかの形での初等幾何学を学んでいなければならなかったのと同じことである。代数の初歩を知らずに微積分学を学ぼうとするのは無謀な企てである。ところで、世間の人と同じ言葉を使わなければならない哲学についてもそれは同じことなのである。何の用意もなしに、哲学の最も深い分析や最も高い綜合に近づいて、それらを理解したような気になったとしてもそれは錯覚であるにすぎない。たとえばカントを読まないでルヌーヴィエを、ヒュームやバークリを知らないでカントを、ロックやデカルトについて何も知らないでヒュームやバークリを、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるいは一般に古代哲学を知らないで近代哲学を理解することは困難である。それだから、ギリシア哲学についても思い違いをしないようにしよう。二分法、アキレスと亀、飛んでいるのに飛ばない矢、競技場についてのエレアのゼノンの諸議論は、もしそれらでもって単に実在的運動が不可能だということを論証しようとしたというだけのことであるならば、彼の議論は単なる詭弁であるということになってしまうことだろう。しかしながら、運動が経験によってのみ知られる事実であって、われわれの悟性にはそれをアプリオリに再構成する力がないことをゼノンが語っていたのだとしたならば、彼の議論は単なる詭弁であるどころか、きわめて高度な哲学的ポテンシャル・エネルギーを蔵していたと言わねばならぬであろう。しかしそのポテンシャル・エネルギーが開発されるためには、デカルト、ライプニッツ、ベール、ハミルトン、ステュアート・ミル、ルヌーヴィエといった大勢の人々が、ゼノンの議論を研究した長い時間が必要だったのである」。

周知のように、ゼノンの議論とは、彼がその師であるエレアのパルメニデスの不動の一者の形而上学思想を擁護するために考案した、運動を否定する議論であり、ベルクソンがこの文中で述べているように、二分法、アキレスと亀、飛矢、競技場についての四つの議論[2]が知られている。それらのうちで説明のし易さと詩的喚起力においてひときわ際立っているのがアキレスと亀の議論であろう。そこでこれによって見るならばそれは次のようである。アキレスはホメロスの『イリアス』に登場するギリシア方の勇将で、要するに駿足の代名詞、亀は言うまでもなく鈍足の代名詞である。しかるにこのアキレスでさえも僅かでも前方から出発する亀に追い付くことができない、というのがその議論である。なぜそうかと言えば、ゼノンによれば、アキレスがもと亀がいた地点に到達する間に亀は少しだけ先へ進むだろう。その第二の地点にアキレスが到達する間にまた亀はもう少しだけ先へ進むだろう。こうしていつまでたってもアキレスは亀に追い付くことができないというのである。これに対してベルクソンによれば、

運動が通過する空間と運動とは区別されなければならない。運動の始点と終点とを隔てる空間は無限に分割されうるから、もし運動がこの空間と同じだけの数の部分から複合されるのであれば、この空間が跨れることは、たしかに決してないであろう。しかしながら、アキレスの一歩一歩は、そして亀の一歩一歩も、不可分で単純な統一体としての運動であるから、たちまちのうちにアキレスは亀を追い越してしまうだろう。ところでこれは、どこまで分析しているかは別として、常識にもかなった意見である。それだからこそゼノンの意見は詭弁であるとされたのである。しかしながら、そのようにするとき常識は、そのような一見他愛もないこの常識的結論に対するベルクソンのこだわりを、いったいどのように見ているのだろうか。そもそも常識はどこまで彼の言うことに付き合う気なのだろうか。

常識は運動の実在性に対するベルクソンのこだわりにどれほども付き合いはしなかった。ベルクソンにおいてはこのこだわりは、常識を覆す、あるいは常識と衝突するさまざまな帰結を生んだからである。彼の処女作『意識の直接的与件に関する試論』[3]においては次のようである。すなわちゼノンの議論は言わば亀の歩幅によってアキレスの歩幅を規定しているのだが、アキレスの一歩も亀の一歩も不可分の統一体としての運動なのであり、したがって量としてではなく質として扱われなければならない。このような量と質との区別から、無限に分割されうる空間と本性上分割されることがない「純粋持続」(durée pure) としての時間との区別が出てくる。ところがゼノンの議論は、この純粋持続が等質的な瞬間から合成されるとみなすところから生まれるのである。換言すれば、それは時間と空間とを同一視しているのである。そして時間を時計で計ることができるとするとき、早くも常識は、ゼノンによるこの時間と空間との混同に加担するのである。

ベルクソンの二番目の主著『物質と記憶』[4]においては、純粋持続する精神の「純粋記憶」と、反復によって形成

される身体の「習慣的記憶」とが区別され、後者が「感覚・運動機能」として言わば大脳そのものであるのに対して、前者は大脳の中に納まらないこと、言い換えれば大脳は記憶心像の貯蔵庫ではないことが、精神医学や大脳生理学の知見に基づいて主張されている。これも常識に反する主張であろう。

ベルクソンの三番目の主著『創造的進化』[5]においては、生命進化が生物に与える自然的な分節構造を無視してそれを恣意的に裁断しようとする機械論的な知性の図式を与えるものとして、ゼノンの主張は批判される。ベルクソンの創造的進化説は、ダーウィンの進化論のように機械論的にではなく、またラマルクのそれのように目的論的にでもなく、「種の起源」を探究している。種は生命の飛躍（エラン・ヴィタル）によって発現してくるのである。ベルクソンはゼノンの師パルメニデスのように「存在」（Être）の形而上学によってではなく「生成」（Devenir）のそれによって生命の歴史を見ているのである。

ベルクソンの四番目の主著『道徳と宗教の二源泉』[6]においては、「閉じた道徳」と「開かれた道徳」との間に引き裂かれて悩む魂の遅疑・逡巡を記述する場面で、ゼノンの「飛ばぬ矢」の比喩が語られている（DS, 32-1005）。「閉じた道徳」と「開かれた道徳」とではそもそもその「源泉」が違うのである。前者は生命進化の成果である「静的社会」の維持・発展を図る道徳である。それは自分の家族や民族を愛することを求め、個人の自然な利害的関心と合致している。これに反して、人類を愛することは、あるいは人類の具体的代替者である「外国人」を愛することは、自然的なことではない。もちろんわれわれ凡百の者達の心底においても、「他者を愛せ」という神秘家達の呼び掛けに呼応する心の動きが兆さないわけではない。しかしながら、それは行うべきことであるとただ悟性的に理解するだけでは行動を起こすには足りない。カントと共に「まさに為すべき行為（当為）であるから、為すことができる」と心を励ましてみても、行動はついに起こらない。人々を奮起させ、社会を変化させるような偉大

な行動は、大いなる情動がなければ生まれない。義務感だけに頼る主知主義的道徳によっては、とうてい「矢は飛ばせない」のである。例えば限りある地球上の財の分配問題を区々たる悟性的分別によって、すなわち常識によって解決できるとは思われない。これに反して、「開かれた道徳」によって解放された魂達は、無数の障害を乗り越えて偉大な愛の行動を易々と実行してしまう。実は彼らにとって乗り越えるべき障害など存在しないのだ。山をも移す信仰という言葉が聖書［マタイ一七―二〇］にあるが、彼らには移すべき山など存在しないのである。大いなる衝動に衝き動かされて彼らは動く。ただそれだけのことである。ゼノンに対して運動を証明するために、立って歩いてみせた哲学者が言いたかったことの射程の内には、実にこのようなことも含まれていたのである。

実にこのようにベルクソンはその生涯にわたってゼノンの議論にこだわり続けている。ベルクソンは『思惟と動き』[7]という書物を生涯の終わりに書いたが、この書物の長い「緒論」(introduction) の中で彼は、「われわれの知性が表象するような運動や変化の観念に内在する矛盾をエレア派のゼノンが指摘したときに、形而上学は始まった」(PM, 8-1259) と述べているのである。

だがこの言葉で彼は何を言おうというのだろうか。形而上学 (métaphysique) と呼ばれる学問ないし思想傾向によって彼は何を考え、また形而上学の開始について彼はどのように評価しているのだろうか。いったい彼は形而上学についてどのような感情を持っているのだろうか。全般的に見る限り、ベルクソンにはニーチェやハイデガーにおけるような形而上学否認の強い姿勢は見られない。ニーチェの系統に属する一連の思想家達が形而上学と呼んで否定する学問は、純粋な論理的思考の対象となる諸観念が構成する体系を真の実在である永遠真理の世界とみなし、感覚に与えられる経験界は時間と共に変化する現象界であるとする、二世界主義的思考傾向のことである。彼らが「存在―神―論的」(onto-théo-logique) と呼んで批判の的にしているこの合理神学的な形而上学に対しては、

ベルクソンも時間こそ実在であるとする生命の哲学者として、それを批判する理由を共有していると言えるであろう。すなわち、概念と推論のみに頼って真実在とみなされるべき英知界の存在を証明しようとするような形而上学の企てに対しては、彼も反対であると言ってよいであろう。しかるに、そのような企てはエレア派のパルメニデスに淵源すると言われている。したがって、そのようなパルメニデスの思想を擁護するゼノンの議論をベルクソンは批判するのである。だが、ベルクソンはエレア派に始まるとされる主知主義的な形而上学を批判すると同時に、また事実と経験に基づく形而上学の意義と可能性とを認めており、そのような形而上学の復興を願っているのである。そのために形而上学という言葉はベルクソンにおいては必ずしも悪い意味を持ってはいないのである。したがって、形而上学に対するベルクソンの態度は、最大限でも、両価（アンビヴァレンツ）的であると言うに止めるべきであろう。彼の考えでは、形而上学は、本来「啓示に富む動的で充実した経験そのもの」であるべきであるにもかかわらず、「そのような経験を超出してしまう、固定的で干からびた空虚な抽象的一般観念の体系」になってしまった。そのように形而上学はそれ本来のあるべきあり方をしていない、それだから彼はそれには反対するが、しかしながらあるべきあり方をする形而上学に対しては決して反対する者ではないということになる。しかしながら、もし形而上学が最初からそのような二世界主義的なものとして始まったのであれば、そのようなものであることが形而上学本来のあり方であり、形而上学にはそれ以外のあり方はできないということになるのではなかろうか。

たしかに、もし形而上学というものが時間の中に実在を求めるのではなくて時間を超えた彼岸にそれを求めることでしかないのであれば、あるいは運動の基礎に常に運動する物、例えば原子のような実体を考える実体主義でしかないのであれば、ベルクソンにとっても形而上学とはただ斥けられるべき思考法でしかなかったと言わねばならぬであろう。ちなみに、彼は運動体なき運動そのものを「動き」(le mouvant) という新造語によって表し、実在

であるこのものを動かない実体として捉える概念としての「思惟」(la pensée) と対立させて把握しているのである。それが『思惟と動き』という彼の最後の書物の題名の意味である。これは西欧的思惟の骨格が形而上学によって与えられていることを認め、それに対立するような立場を探求するという決意を表明するものであると言えるであろう。

しかしながら、冒頭に引用した長いテクストが示しているように、ベルクソンは西欧的思惟の歴史的研究を現代哲学にとって必須のものであると述べているのである。してみれば、なんらかの形でベルクソンは形而上学の意義を大いに認めていることになる。上記のテクストのゼノンの議論に関する部分だけを再記するならば、彼は次のように言っている。

「エレアのゼノンの諸議論は、もしそれらでもって単に実在的運動が不可能だということを論証しようとしたというだけのことであるならば、彼の議論は単なる詭弁であるということになってしまうことだろう。しかしながら、運動が経験によってのみ知られる事実であって、われわれの悟性にはそれをアプリオリに再構成する力がないことをゼノンが語っていたのだとしたならば、彼の議論は単なる詭弁であるどころか、きわめて高度な哲学的ポテンシャル・エネルギーを蔵していたと言わねばならぬであろう」。

なお『物質と記憶』の中でゼノンの議論について述べている箇所でも、彼はその議論の逆説的効用について述べ、それを高く評価している。取り上げられるのは「とかく省略されがちな第四の議論」すなわち〈競技場の議論〉である。「今競技場において一台の戦車が他の二台の戦車とすれ違うとする。ところで、対向車のうち一台はこちらと同じスピードでこちらへ向かって走ってくるが、もう一台は停まっているとする。その場合、こちらは同じ運動しかしていないのであるが、その同じ運動が、前者に対しては後者に対しての二倍の運動になる。これは矛盾であ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com